

第23回会津血液研究会抄録

＜特別講演＞

日時：2024年11月27日（水）19時～20時30分

場所：会津若松ワシントンホテル，会津若松市

オンライン同時開催

悪性腫瘍と血栓塞栓症

新潟薬科大学 薬学部 病態生理学

森山 雅人

＜一般演題＞

外来化学療法室における取り組みと看護師の役割
～血液疾患治療を支える看護実践を通して～¹⁾福島県立医科大学会津医療センター附属病院
看護部²⁾福島県立医科大学会津医療センター附属病院
血液内科長谷部美夏¹⁾，富田 佳加¹⁾，加藤 恵美¹⁾
清原 千貴²⁾，角田 三郎²⁾，山田香代子¹⁾
大田 雅嗣²⁾

外来化学療法室（以下，化療室）は，年間約3,000件を運用し，うち約1,500件が血液疾患患者である。血液内科におけるがん薬物療法の目的は，治癒・寛解を目指すことにある。治療期間は長く，医療者は発症から転機まで人生の重要な時期に関与することになる。

したがって，患者の治療目的や計画に沿って，有害事象へのセルフケア支援や生活支援と共に，患者の身体的，心理社会的側面に沿った看護を実践している。がん薬物療法における多様な治療背景・目的をもつ患者に対して生活の質（QOL）を重視しながら多職種と協働し副作用のマネジメントや意思決定支援を図っている。

日常生活を営みながら治療を継続できることは，化療室のメリットである。しかしその反面，がん薬物療法は全身へのリスクはもちろん，患者は病状への不安，社会生活上の役割遂行の困難感などの心理社会的苦悩を抱えている。安全で安心した治療や療養を継続するための化療室の取り組みや，症例を通してがん薬物療法に関わる看護師の役割と看護実践について報告する。

1990年代までの慢性骨髄性白血病（Chronic 厚生労働省の人口動態統計月報年計によれば，2022年の死因順位別で第1位は悪性新生物の38万5,787人で，以降心疾患，老衰，脳血管疾患と続いている。年次推移をみても，悪性新生物は一貫して上昇を続け，1981年以降死因順位第1位であり続けている。一方，血栓症は心筋梗塞，脳梗塞，肺血栓塞栓症などに代表される凝固関連疾患であるが，以前より担がん状態では血栓を生じやすいことが知られていた。実際，がん患者の死因で，血栓症はがんの進行に次いで多いという報告もあり，血栓症の合併は担がん患者の生命予後に大きな影響を及ぼしている。

近年では，がんに伴う静脈血栓塞栓症（venous thromboembolism：VTE），動脈血栓塞栓症（atrial thromboembolism：ATE）ならびに解釈が様々である Trousseau 症候群などを一括した，がん関連血栓塞栓症（cancer-associated thromboembolism：CAT）という概念が定着している。CATの発症には，患者関連因子，がん関連因子，治療関連因子など，多種多彩な要因が関与しており，いくつかの予測スコアも報告されている。また，がんは増殖や転移，浸潤の過程で，生体防御反応を担う血小板－凝固－線溶系を巧みに利用している。がんの進展は宿主の止血システムを破綻し，病的な血栓を形成する。CATの病態生理は複雑かつ多様であるが，やはり血小板－凝固－線溶系が土台となっている。なお，VTEについては，本邦のガイドラインも改訂され，診断におけるD-ダイマーの有用性や，治療における直接経口抗凝固薬（direct oral anticoagulants：DOAC）の有効性も記載されている。特にCATにおいては，その評価と活用に注意が必要である。本講演では，最新の知見を加えながら，CATについて概説する。